

令和7年度 “社会を明るくする運動”可児地区作文コンテスト

中学生の部

社会を明るくする運動可児地区推進委員会 会長賞

「卓球が教えてくれた、地域の絆と生きがい」

可児市立蘇南中学校 3年

柴田 夕陽

「社会を明るくする運動」と聞いて、私が真っ先に思い浮かべたのは、中学3年間を捧げた卓球部の活動です。一本のラリーを必死で追いかけるその先で、私たちは技術の向上だけでなく、地域社会との温かいつながり、そして世代を超えた人々のやりがいや生きがいに触れることができました。

私が卓球を始めたのは小学校3年生の時、祖母の勧めがきっかけでした。しかし、私たちが通う中学校の卓球部は、決して強豪校ではありませんでした。私を含め小学校からの経験者は4人。他の部員は全員、中学校からラケットを握った初心者です。最初は経験者と初心者の実力差もありました。しかし、「全員で強くなりたい」という一つの目標に向かって、私たちは毎日必死に練習に励みました。初心者の仲間の試合を全力で応援し、勝てた時には部員全員で自分のことのように喜び合いました。その積み重ねが、私たちのチームを本物の「仲間」にしてくれたのだと思います。

私たちの活動を大きく変え、地域へと視野を広げてくれたのは地域クラブで指導されているコーチとの出会いでした。コーチは、ご自身の仕事の合間を縫って、私たちの練習を熱心に見てくださいました。技術指導はもちろんのこと、「卓球は一人ではできない。仲間や応援してくれる人への感謝を忘れるな」と、人としての心構えも教えてくださいました。

コーチの計らいで、私たちの練習には、近所の小学生も参加しています。私も卓球を始めた時は中学生の先輩に優しく教えてもらい、私も同じように小学生に接し、私たちが教えた小学生が楽しそうにラリーを続ける姿を見た時、卓球というスポーツが、この地域の新しいコミュニケーションの場になっていることを実感しました。私たちが卒業した後も、彼女らがこの卓球部を受け継ぎ、さらに新しいつながりを生んでいってくれることを想像すると、胸が熱くなります。

卓球の魅力は、年齢や性別に関係なく、誰もが楽しめる生涯スポーツであることです。地域の大会に出場すると、小学生から、時には80歳を超えるような大先輩まで、本当に様々な世代の方々と対戦する機会がありました。一宮市で行われた大会で対戦した80代の女性は、「君たちと試合すると、こっちまで元気をもらえるよ。」と、試合をしながら笑いかけてくれました。その言葉と心から卓球を楽しんでいる姿に、私は深く心を打たれました。卓球が、この方にとっての「生きがい」そのものであることが伝わってきたのです。卓球台を挟

んでラリーを交わす時間は、単なる勝ち負けを超えて、世代間の心を通わせる貴重な架け橋となっていました。

私たちの集大成となった最後の中体連。目標であった東海大会出場を果たした瞬間、会場は大きな歓声に包まれました。レギュラーメンバーだけでなく、今回試合に出られなかった仲間も、客席から声が枯れるまで応援し続けてくれました。保護者の方々は、毎日の送り迎えや食事のサポートだけでなく、誰よりも熱心なサポーターとして私たちを支え続けてくれました。そして、地域の方々も「頑張れよ」といつも温かい声をかけてくださいました。私たちの東海大会出場は、決して私たちだけの力で勝ち取ったものではありません。チームの仲間、コーチ、小学生たち、地域の皆さん、そして家族。応援してくれる全ての人の想いが一つになった結果だと、心から感じています。私たちの頑張りが、支えてくれた人たちの笑顔や「やりがい」につながっていたのだと気づいた時、これ以上ないほどの喜びを感じました。

3年間、がむしゃらに白球を追いつけた日々。それは、卓球という一つのスポーツが、地域に住む人々をつなぎ、互いの存在を認め合い、支え合うための素晴らしいプラットフォームになるということを教えてくれました。一つの目標に向かって協力し合うこと。世代を超えて交流し、互いに元気を与え合うこと。誰かの頑張りが他の誰かの生きがいになること。これこそが「社会を明るくする」ための、最も大切に温かい力なのだと、私は信じています。

中学校の部活動は終わりますが、この経験で得た学びは、私の人生の大きな財産です。これからも、人と人とのつながりを大切にし、支え合いの輪を広げていくことで、私が暮らすこの地域社会に貢献していきたいと思います。